

「キリスト者の自由」

—使徒行伝講解説教 34—

使徒行伝 15章 22節～35節

説 教 本庄侑子牧師

かつて、ルターは言いました。「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって、何人にも従属しない。」しかし同時に、「キリスト者はすべてのものに奉仕する僕(しもべ)であって、何人にも従属する。」

私が初めてキリスト者の自由に触れたのは高校1年生の頃でした。それまでは、学校や家のルールに対する不満が満ちていました。しかし、教会に導かれてから、自分の思い通りにすることは、実は自分勝手な自分自身の奴隷、罪の奴隷になっているだけで、最も不自由なのだということに気づかされました。

今日の聖書箇所ではキリスト者の自由が語られています。前回の箇所で教会にある問題が起こりました。ユダヤ人のキリスト者が、異邦人のキリスト者に、救いのためには割礼を受けるべきだと主張したのです。会議を通して導かれた結論は、全ての人をお救いになるのが神の御心であり、そのために、神様の方が全ての手立てを尽くしてくださったということ、だから、救われるために私たちの側で行うべきことは何一つない、ということでした。

エルサレム教会は、異邦人が多くいるアンテオケ、シリア、キリキヤ教会に会議の結論を伝えるために手紙を書きました。しかし、ここに至って、「聖霊とわたしたちとは、次の必要事項のほかは、どんな負担をも、あなたがたに負わせないことに決めた。」(28節)として、「必要事項」を書き加えました。

必要事項とは、「偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、不品行とを、避けるということ」(29節)。旧約聖書のレビ記で、律法として定められていることでした。当時、礼拝は聖餐が中心で、一緒に礼拝するということは一緒に食事をするということと等しく、ユダヤ人と異邦人が一緒に礼拝するには食事の問題が立ち上がりました。

教会は、ユダヤ人と異邦人が一緒に礼拝できるように、異邦人がユダヤ人に配慮をして、これらのことを守るように願ったのではないかとされています。神の前では、ユダヤ人も異邦人も関係ない。しかし、人間の側においては、すぐに違いを乗り越えることが難しく、それぞれに配慮を必要としたということでしょう。

福音に生きる者にとっては、もはや律法による食事の規定は守らなくても良いのです。主イ

エスの救いによって罪赦され、ただその恵みによって清くされるからです。一方で、主イエスの救いを信じたけれど、なお食事の規定を守らないではいけない人がいたときに、無理矢理、偶像に供えた肉を食べさせたり、もう関係ないからとわざわざ血を飲んで見せたりすることはないのです。そんなことで礼拝から遠ざかってしまわないように、共に御言葉を聞き続けられるように、互いに配慮し合うのです。

パウロは言いました。「わたしは、すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。…すべての人に対しては、すべての人のようになった。なんとかして幾人かを救うためである。福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである。」(コリント人への第一の手紙9章19節～23節)何より、神様がそのようなお方でありました。神である方が、その自由を使って神の身分を捨て、人間となってくださいました。

キリスト者は自分を縛るもの、この世にあって支配するものから自由にされています。わたしたちを支配して下さる主人はイエス・キリストだけだからです。しかし同時に、与えられている自由を、神の御心のために使うことができます。自由であるのに、喜んで隣人のために不自由になることさえできるのです。

エルサレム教会の決定と注意事項を聞いた人たちは、その言葉を喜んだとあります。また、エルサレム教会からの使者であるユダヤシラスと話をし、励まし、力づけられたともあります。手紙だけでは思いが十分に伝わらないかもしれないと、わざわざ訪問もして、互いに顔を合わせながら、この決定を伝えたのです。

キリスト者とは、神と隣人との交わりに生きる者です。国や民族、性格や背景が違っても、主イエスによって結び合わされ、共に御言葉を聞き続ける教会生活を送っていきます。そこには、全ての人を救おうとされる神様の思いが満ちていき、その御心のために歩いていく力、互いに配慮し合い、新しく招かれた人のために配慮せずにはいられない伝道の力が、絶えず、新しく、満ち溢れていくのです。

(記 説教要約奉仕者)